

ニッポナリアと対外交渉史料の魅力 (23)

この万次郎らが巽（辰巳、即ち南東）の方角へ漂った物語として『漂異紀畧』という書名になるのですが、漂流した海域やアメリカで体験したことだけでなく、彼が持ち帰った万国地図も模写するなど、随所に万次郎から知識を引き出そうとする小龍の意欲を見て取ることができます。この結果、小龍自身もそれまで持っていた世界観を大きく上回る知識を得ることになったようです。

こうして万次郎からの聞き書きで、小龍の自筆本となる『漂異紀畧』は、翌、嘉永六（1853）年に時の土佐藩主である山内容堂に献上されました。その後、小龍は藩命で薩摩藩の反射炉と大砲鑄造の視察に加わり、さらに帰路、単独で長崎へ赴いて蘭学を通じた知識を深めていきます。

■『漂異紀畧』、藩是の策定に繋がる

完成した『漂異紀畧』が容堂に捧げられた嘉永六（1853）年は、奇しくもペリーが来航した年で、時期もその直前でした。本書は容堂によって江戸へ持ち込まれて大名間で人気を博し、万次郎の人的価値を高めました。彼は藩から中浜の姓を与えられて徒士格に遇されますが、この年幕府に出仕を命ぜられます。そして、軍艦操練所の教授などを経て万延元（1860）年には咸臨丸の通訳として勝海舟らに従って渡米するなど、幕府の軍事と外交に関わっていきます。このような彼の栄達に比例するかのようにより、本書の価値も高まっていったものと推測できます。

また、藩内では参政の職に就いていた東洋が、一時の失脚後もこの職に復帰したこと、そして彼が攘夷を叫ぶ勤王党に暗殺され、その勤王党が一掃された後も東洋の遺志を継ぐ後藤象二郎が参与に起用されたことなどと相まって、本書は依然として重要なものであったと考えられます。特に、国内の外国人勢力が台頭する中で容堂が提唱することになる公武合体論から大政奉還の建白へと向かう政策については、本書の内容が海外情勢を見極める要素の一つになっていたとしても不思議ではありません。

■龍馬、小龍の理論に心酔する

話は戻りますが、小龍のもとへ二十一、二歳

の坂本龍馬が訪れたのは嘉永七（1854）年頃と推測されています。この時期以降のことは『藤陰略話』⁽²⁾という手記に書かれています。解説本にある北小路健氏の現代語訳によれば、剣術修行のための江戸滞在中に品川沖でペリーの黒船を見ていた龍馬は土佐に戻っても心の動揺を隠しきれず、自分がなすべきことを思い悩んでいたのです。小龍は齡三十二、三歳の自分を世捨て人の風流人と謙遜しながらも、切実に訴えかける龍馬に海運業を興すことの必要性やそのための大船を建造すること、科学文明の摂取と開発、さらには富国強兵を目指さなければならぬ理論を教えたようです。この後、龍馬は何度も小龍を訪ね、これを実現するための詳細な案を述べあっています。

特に、小龍は以前から温めてきた案として、藩や国を頼らず個人的な商業として外国船を入手して有志を募り、海運業を興して航海を覚えさせれば有事の際に少しは役に立ち人材も育つ、と龍馬に提案しています。これを聞いた「龍馬は手を拍って喜んだ」と述べ、龍馬は「貴方は内で人材集めにあたり、私は外で金策に奔走します」と書いています。⁽³⁾従って、龍馬が後に作る亀山社中から海援隊となる組織の原案は元々、小龍が起案していたものであり、東洋から小龍へ、そして龍馬へと繋がっていく土佐の幕末の思想の流れを確認することができます。

■龍馬は『漂異紀畧』を読んでいたのか

このように小龍と龍馬は意気投合していますが、両者の間で『漂異紀畧』を基にして意見を論じ合った記録はありません。小龍の子孫の宇高随生氏は「紀畧が龍馬と結び付けられて論じられている様だが、これに関しては別に何等の根拠も存在していない⁽⁴⁾」と述べています。龍馬が小龍に初めて会った時期には既に『漂異紀畧』は完成していたことから、龍馬もその風評は知っており、小龍との関係が深まるにつれてこの書物を見なくなったものと想像できますが、『藤陰略話』にはこのことについての記述はありません。小龍にとって『漂異紀畧』は藩主に献呈した大切なもので、最近親しくなったばかりの